

予測医療現状と展望は

弘大でCOI特別講演会

弘前大学と県、民間企業が連携して脳卒中や認知症の早期予兆発見、予防法開発に取り組みプロジェクトの研究拠点「COI拠点研究推進機構」事業の一環で、弘大は8日、同大大学院医学研究科で特別講演会を開いた。京都大学大学院医学

研究科臨床システム腫瘍学の奥野恭史教授が



ビッグデータ解析の現状を語る奥野教授

講師を務め、「ライフビッグデータの医療健康分野応用研究の最前線」と題して講演した。

奥野教授はビッグデータからの予測医療と個別化医療について、現状と今後の展望について説明。京都大医学部付属病院のがん患者に実施した40種の検査の中から、余命予測率が高い検査項目の組み合わせを探した結果、アルブミン値、乳酸脱水素酵素値、NLR（好中球数とリンパ球数の比率）の組み合わせ

せが余命1〜6カ月までの予測正答率80%以上だったことなどを紹介した。

また同病院がんセンターで昨年4月から、個々人の遺伝子タイプから薬剤反応性や副作用危険性を判定するゲノム診断を原発不明がん患者を対象にはじめ、個別化医療を進めていることを語った。

(成田真矢)